

共同研究の経過と概要

三浦正幸

本書は、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が二〇〇四年度から〇六年度にかけておこなった、基幹研究「神仏と生死に関する通史的研究」（総括研究代表者 新谷尚紀）を構成する二つの共同研究のうち、「神仏信仰に関する通史的研究」（研究代表者 三浦正幸）としておこなった研究の成果報告書である。なお、もう一つの共同研究「生死と儀礼に関する通史的研究」（研究代表者 新谷尚紀）の成果報告書は、『国立歴史民俗博物館研究報告』第一四一集として別に発行するものとする。

この基幹研究は、歴博の創設時以来の「基層信仰」という基幹研究課題に包含されるものであり、これまで歴博においておこなわれてきた研究成果を継承しつつ、それをさらに発展させる新たな研究開拓を目指したものである。日本の歴史と文化に関する研究分野において我が国の中核的研究機関の一つである歴博にとって、神仏信仰と生死観念に関する本基幹研究は、重要な研究課題であると言える。

この基幹研究では、「社会・記憶・表象」をキーワードとして掲げ、多様な研究分野から通史的な歴史知識や研究成果を集積する基礎的作業をおこなう。この方面の研究課題はこれまで観念的に捉えられがちであったが、より具体的、実証的に研究を推進するものとした。したがって、建造物・美術工芸品・樹木といったモノ、文献や絵画や古写真などの歴

史資料、あるいは儀礼・慣習といった無形の伝統的文化資料を総合して、それらの具体的な再確認とその論理的解釈をおこなうものである。歴博の民俗や歴史の研究者に加えて、宗教史・神道学・国文学・建築史・美術工芸史・植生史などの学際的な研究者との協業のもとに研究を進めることによって、日本列島に展開した神仏信仰と生死観念を歴史的観点から日本文化論の文脈で明らかにしていくところに研究のねらいがある。

（1）共同研究の目的

この「神仏信仰に関する通史的研究」は、神仏習合（神仏混淆）という仏教との交渉事象を神社側から見た視野に入れつつ、まずは神社と神祇信仰の歴史研究を試みるものである。神社を単に宗教的な施設としてだけでなく、政治的宗教的権威として、あるいは建造物・美術工芸品の創造技能や伝統的芸能・儀礼の創作技能の表象的機能として、観光資源的機能や環境保全機能として、文献資料や美術工芸品等の収蔵保管機能としてなど、多種多様な機能を併せもつ有機的文化構造物とみる視点に立ち、多様な専門分野の研究者の学際的な協業により、日本文化論の文脈で神社と神祇信仰についての具体的な歴史研究を行うことを目的とする。誰が何のために神仏（習合的に見た神）の存在を強調し、神社とい

う建造物とモリの複合的施設の場に信仰と儀礼と芸能とを仕組んできたのかという問題を、具体的な歴史資料情報の蓄積という基礎作業を試みつつ理論的考究を併せ試みた。

二〇〇四年度から〇五年度は、広範な歴史学、民俗学などにおける神社研究の論文・文献目録の作成作業を継続するとともに、古代から現代にいたる各時代、各分野における神社と神祇信仰に関連する個別研究を渉猟し、それらを統合した総合的な神社研究を推進することを目的として、研究会を開催し議論をおこなった。

二〇〇六年度には、当初より続けてきた研究会の成果を集大成することを目的とし、活動をおこなった。これまでの研究会において、多様な専門分野からの研究者の学際的な協業により、神社と神祇信仰に関する広範な分野を糾合した、初めてとも言ってよい研究論文・文献目録の作成作業を行い、大部な『研究動向・文献目録』の編集を行った。

その作業を通じて、神社と神祇信仰の歴史の上で画期となる時期として、一〇世紀（文化の国風化の時期、一宮など新しい有力神社の萌芽期）、一四世紀（古代からの有力神社の衰退期、村の鎮守社に繋がる新しい神社の創設期）、一六世紀後半～一七世紀（中世に失われた文化の再興期）、一九世紀（神仏分離と政治権力の介入期）の四つの変革期が想定された。〇五年度には建築史学、中世史学、美術史学、中世有識故実の各分野の研究発表を通じて、一〇世紀における神社の変化について、学問分野の垣根を初めて完全に切り払って具体的に議論検証がなされた。

そうした〇五年度までの研究会における研究発表と議論を通じて、多様な専門分野の相互間において、あるいは一つの分野の中においても、神社と神祇信仰の歴史に関しての意見の相違が存在し、その根の深さを改めて認識させられた。その根元に横たわる「神社とは何であるのか」という問題に対して、より一層の議論が必要であると理解し、神社と神祇信仰の歴史的研究という日本文化論の中心の一つを占める、広範で膨

大なテーマのなかより、神社の成立・一〇世紀の変革・中世の一宮制・近世の神道史・明治維新の神仏分離といった、特に重要な論点に絞って〇六年度は集中的に議論をおこなった。その研究成果として、神社と神祇信仰の歴史における諸課題について、研究会に参加した多くの研究者による学際的な立場から見た、初めてともいえる本研究報告書の刊行に至った。

（2）共同研究の組織（◎は研究代表者、○は管理進行者）

〔共同研究員〕（共同研究員の所属は二〇〇七年三月時点）

〈館外研究員〉

井上 寛司 大阪工業大学情報科学部

井上 智勝 大阪歴史博物館学芸員

ウルズラ・フラツヘ ドイツ・日本研究所

遠藤 潤 國學院大學日本文化研究所

小椋 純一 京都精華大学人文学部

五島 健児 八坂神社文教部

櫻井 治男 皇學館大学社会福祉学部

蘭田 稔 皇學館大学大学院文学研究科

橋本 政宣 東京大学名誉教授

東四柳史明 金沢学院大学美術文化学部

藤森 馨 国士館大学文学部

北條 勝貴 上智大学文学部

三橋 健 國學院大學神道文化学部

牟禮 仁 皇學館大学神道研究所

◎三浦 正幸 広島大学大学院文学研究科（本館・客員教員）

近藤 好和 神奈川大学（本館・客員教員）

〈館内研究員〉

井原今朝男 本館・研究部・教授

○新谷 尚紀 本館・研究部・教授

吉岡 真之 本館・研究部・教授

関沢まゆみ 本館・研究部・助教授

松尾 恒一 本館・研究部・助教授

山田 岳晴 本館・機関研究員

山口 えり 本館・研究部リサーチアシスタント

〔ゲストスピーカー〕

有富 純也 日本学術振興会特別研究員

大隅 和雄 東京女子大学名誉教授

加瀬 直弥 國學院大學研究開発推進センター専任講師

永田 忠靖 國學院大學大学院文学研究科特別研究生

錦田 剛志 島根県立古代出雲歴史博物館主任学芸員

(兼) 島根県古代文化センター主任研究員

西田かほる 静岡文化芸術大学助教授

幡鎌 一弘 天理大学おやさと研究所助教授

丸山 士郎 東京国立博物館主任研究員

山口 佳巳 広島大学大学院文学研究科院生

E・ロコバント 東洋大学法学部教授

和田 萃 京都教育大学教育学部教授

(3) 共同研究の経過

〔二〇〇四年度(平成一六年度)〕

第一回研究会 二〇〇四年六月二六・二七日 国立歴史民俗博物館

三浦 正幸 「建築史と神社研究」

小椋 純一 「神社と植生史研究」

櫻井 治男 「近代日本と神社史」

井上 寛司 「中世史と神社研究」

北條 勝貴 「古代史と神社研究」

蘭田 稔 「神仏習合の研究視点」

ウルズラ・フラツヘ 「厳島神社における神仏分離」

三橋 健 「大和言葉と神社」

松尾 恒一 「南都寺院の修正会・修二会」

関沢まゆみ 「宮座祭祀と神社研究」

新谷 尚紀 「神社祭祀研究と民俗学」

第二回研究会 二〇〇四年九月一八・一九日 国立歴史民俗博物館

近藤 好和 「儀仗と神宝」

井上 寛司 「中世神社史の概要」

松尾 恒一 「神事芸能」

小椋 純一 「日本における植生の歴史(概要)」

北條 勝貴 「神社通史の構想：古代(奈良時代まで)」

櫻井 治男 「明治初期の「神社」調べ」

三浦 正幸 「神社建築」

ウルズラ・フラツヘ

〔現在神道について研究しているドイツ語圏の日本研究者たち〕

関沢まゆみ 「民俗学の宮座論とその分析視角」

新谷 尚紀 「神社の通史的研究へむけて」

第三回研究会 二〇〇四年一月二〇・二一日 国立歴史民俗博物館

E・ロコバント 「神社は宗教にあらず
―神社と国家の関係について―」

北條 勝貴 「奈良時代の神祇制度と在地祭祀
―神祇令・班奉幣・神社統制―」

山口 佳巳 「仁治度厳島神社社殿の復元について」

第四回研究会 二〇〇五年三月一・二日 国立歴史民俗博物館

井上 智勝「近世の神社と本所」

大隅 和雄「文化史における神仏の上下関係について」

遠藤 潤「気吹舎の学問と吉田家・白川家

——一九世紀日本社会における意味をめぐって——」

〔二〇〇五年度（平成一七年度）〕

第一回研究会 二〇〇五年六月四・五日 国立歴史民俗博物館

藤森 馨「神宮祭主成立の再検討」

三浦 正幸「神社建築史研究の問題点」

櫻井 治男

「近代における地域神社の変容に関する研究状況と課題」

山田 岳晴「安芸国の玉殿と厳島神社玉殿」

第二回研究会 二〇〇五年九月一六日 国立歴史民俗博物館

東四柳史明「中世能登国石動山について」

橋本 政宣「吉田家の諸社家官執奏運動

——寛文九年吉田執奏一件を中心に——」

井上 寛司「中世諸国一宮制の理解をめぐって

——諸説の批判的検討と今後の研究課題——」

藪田 稔「山王日吉社をめぐる神仏関係」

第三回研究会 二〇〇五年一二月三・四日 国立歴史民俗博物館

小椋 純一「神社のモリの移り変わり（明治と今と）」

五島 健児「近世祇園社の年中行事」

三浦 正幸「八坂神社と神社建築」

井上 寛司「中世の出雲大社」

丸山 士郎「神像について」

安達 文夫「出雲大社周辺の景観変化

・タッチパネルの制作について」

第四回研究会 二〇〇六年二月一〇・一一日 国立歴史民俗博物館

新谷 尚紀「神社と古伝祭——民俗学の視点から——」

和田 萃「古代史からみたカミ祭り」

三橋 健「全国の神社数について」

〔二〇〇六年度（平成一八年度）〕

第一回研究会 二〇〇六年四月二二・二三日 国立歴史民俗博物館

テーマ：古代史ワークショップ・神社の成立をめぐる諸問題

錦田 剛志「〈神社〉の成立をめぐる研究視座

——主として考古学の研究動向と展望——」

有富 純也「神社社殿の成立と律令国家」

北條 勝貴「〈神社〉の成立をめぐる論点整理」

討論「〈神社〉の成立をめぐる諸問題」

テーマ：近現代史ワークショップ・明治維新时期における神仏分離と

地域神社

遠藤 潤「明治維新时期における神仏分離をめぐる論点整理

——阪本是丸の論を中心として——」

櫻井 治男「明治維新时期における神仏分離と地域神社」

討論「明治維新时期における神仏分離と地域神社」

第二回研究会 二〇〇六年八月五・六日 国立歴史民俗博物館

テーマ：十世紀ワークショップ・十世紀における変革

近藤 好和「有識故実の成立」

加瀬 直弥「十世紀の七道諸国における神社修造

——前後の時代と比較して——」

藤森 馨「平安時代中期に於ける神祇信仰」

討論「十世紀における変革」

テーマ：中世史ワークショップ・中世諸国一宮制の理解をめぐって

井上 寛司「中世諸国一宮制の基本的性格

——中世前期から後期へ移行を中心に——

永田 忠靖「中世後期における諸国一宮の現状と近世への変遷」

討論「中世諸国一宮制の理解をめぐる」

第三回研究会 二〇〇六年一月二三・二四日 国立歴史民俗博物館

テーマ：近世史ワークシヨップ・近世神道史における画期

幡鎌 一弘「寛文期における吉田家をめぐる諸問題

——執奏・裁許・伝授・勸請・神学——

井上 智勝「寛文期幕藩領主の宗教政策と思想」

テーマ：近世史ワークシヨップ・近世神道史における論点——神職組

織を中心に——

西田かほる「近世の神職組織——甲斐国を中心として——

井上 智勝「近世の神職組織に関する事例紹介」

討論「近世神道史における画期と論点」

テーマ：古代史ワークシヨップ・神社の成立をめぐる諸問題

山口 えり「神社の成立と律令国家

——広瀬大忌祭と龍田風神祭の再検討——

(4) 研究成果の概要

神社と神祇信仰の歴史研究は、日本文化論における重要な課題であつて、本来は非常に広範で学際的な研究分野であるにもかかわらず、これまで日本史・神道史・建築史・美術史・芸能史・考古学・民俗学・植生などの個々の研究分野で独自に行われてきた。その結果、「神社」や「神道」といった基本概念についてさえ共通の学術的定義や理解がなされておらず、その起源や変遷、あるいはその本質や実態を学際的に議論するに際しては、大きな支障となってきた。

本研究会では、日本史・神道史・建築史・美術史・民俗学・植生といっ

た、神社と神祇信仰の研究にかかわるほぼすべての分野からの研究者が
結集し、初めてといっても過言ではない学際的な研究発表と議論を行う
ことができた。その集大成として、古代から近現代に至る神社と神祇信
仰の通史を現段階の研究成果として取りまとめることができたことを主
たる成果として挙げたい。また、それに包含される、あるいは付随する
問題として、主に考古学者と一部の建築史家によって提示されている古
墳時代以前の「神殿」や「祭殿」は神社本殿とみなせるかどうか、天武
朝の官社制成立を神社本殿成立とみなせるかどうか、神社本殿が仮設の
本殿から成立したかどうか、二十二社制や諸国一宮制が政治史にどの程
度強く影響を及ぼしていたのか、近世における宗教政策や神職組織など
がどのようなものであったか、明治の神仏分離の実態はどのようなも
のであったか、神宝の意義をどのように理解するのか、鎮守の森は原生樹
林なのか、海外とくに日本研究が盛んなドイツから見た神社や神道はど
のようなものか、といった諸課題に対して、研究会として的一致した見
解を得たり、あるいはさらなる協同研究の必要性を認めたりした。そし
て、神社研究における全分野を結集した初めての学際的研究会の最大の
成果は、これまで等閑視されたり、分野ごとに勝手に認識されたりして
きた諸課題に対して、一定の共通理解をなし、神社と神祇信仰の完全な
る歴史を記述する第一歩を踏み出したことである。

その集大成となる本研究会報告書は、研究会における議論を踏まえて神
社と神祇信仰の通史を記述するとともに、以上の諸課題について、研究
会参加者による最新の研究成果を収めるものである。なお、この研究報
告書に掲載される通史や研究論文等は、今後さらなる研究の深化と拡大
の基本となるものであって、この種の研究会の継続が今後とも必要なこ
とを付け加えたい。

また、この基幹研究と連動するものとして位置づけられるのが、事
前研究でもあった個別共同研究「神社の多面性に関する資料論的研究」

(二〇〇一〜二〇〇二年度) および、歴博の企画展示「日本の神々と祭り
神社とは何か?」(展示プロジェクト委員会二〇〇三〜〇五年度) の開
催(二〇〇六年三月〜五月)である。その企画展示もこの基幹研究の研
究成果の公表の一つの大きな柱と位置づけることができる。

*各論文末に記載されている執筆者の所属は、論文投稿時の所属である。

(広島大学大学院文学研究科教授、国立歴史民俗博物館共同研究代表者)